

14 月明かりのヒースの土手

(『シュロップシアの若者』9番)

人里離れた月明かりのヒースの土手

わたしのそばで羊が草を食<sup>は</sup>んでいる

昔は十字路のすぐ側で

絞首台の鎖がガチャガチャ鳴っていたものだ

のんきな羊飼いが 月明かりのもと

5

そこで羊の群れに草を食<sup>は</sup>ませていて

月に照らされた群れの頭上高々と

首を吊られた男が浮かんで見えたりしたらしい

今では 首吊りはシュルーズベリ監獄の中

夜が明けると死んでゆく者たちに

10

汽笛とレールの軋<sup>まし</sup>む音だけが

夜通し淋しく伝わってくる

今宵 監獄の中には

眠っているのか 覚めているのか

養<sup>さい</sup>の目が一つ違えば

15

娑婆<sup>しゃば</sup>で安穩<sup>あんのん</sup>と眠っている輩<sup>やから</sup>よりましな若者がいて

夜明けの時刻<sup>とき</sup>が告げられると

処刑人の縄が むき出しの首にかけられる

首吊りの輪にかかるより もっとましな事のために

神様が創<sup>はず</sup>られた筈の首

20

命の糸がプツンと切れて

踵<sup>かかと</sup>が宙に浮く

大地を踏みしめて歩む輩<sup>やから</sup>と同じくらい

やつを真っすぐに支えていた踵<sup>かかと</sup>が

というわけで これから夜通しここで待機して

25

夜明けを待つとしよう

吊られるやつは 八時が鳴るのは聞けても  
九時の鐘を聞くことはない

こうして わが友の安眠を祈ろう  
会ったことはないが 百年前  
このヒースの土手で月に照らされた群れを見張っていた  
のんきな羊飼いたちと同じ安眠を

30

(山中光義訳)